



南国のパラオを忘れない ～パラオ共和国ゆかりの地、宮城県蔵王町～

宮城県蔵王町まちづくり推進課

「南のパラオ」と「北のパラオ」

日本から3,000キロも南にあるパラオ共和国。サンゴ礁に囲まれ、ダイビングや釣りを楽しむ観光客でぎわう常夏の楽園です。しかし、先の戦争で日本の軍事拠点となつたが故、ペリリュー島では1万22名もの日本兵が玉碎するという、暗い歴史がある国でもあります。

第一次世界大戦後、国際連盟により日本が委任統治を受けて以来、パラオには多くの日本人が移住。1940年頃には2万人以上の日本人が生活し、パイナップルやサトウキビの栽培に従事していました。

第二次世界大戦の敗戦により、在留日本人の引き揚げ先のひとつとして選定されたのが、宮城県蔵王山麓の国有林でした。1946年3月に第1陣、同年5月に第2陣が到着し、計32戸の入植者が定着しました。当時この地は地名がなく、細い原っぱが続いていた土地だったため、通称「細っぱら」と呼ばれていましたが、南洋のパラオを忘れないように「北のパラオ＝北原尾（きたはらお）」と名付けられました。

入植当時は戦後の混乱期で、食料も農機具もありません。入植者たちは南国の美しい島パラオでの生活を思い出しながら、雑木やシノダケが生い茂る未開の地を人力で掘り起こし、困難を極めた開墾作業をすすめました。彼らの血のにじむような努力により、原野を開拓し冷害を乗り越えた「北のパラオ」は、県内でも有数の酪農地帯となりました。

このような歴史的背景により、2001年、トミー・レンゲサウ・ジュニア大統領が蔵王町を訪問しました。パラオでは、日系人のクニオ・ナカムラ大統領時代（1993～2001年）より蔵王町への訪問を希望されていたそうで、念願叶っての訪問となりました。

北原尾地区で開かれた歓迎昼食会やウェルカムパーティーでは、かつてパラオに暮らしていた住民と、当時

の様子の思い出などで会話がはずみました。大統領は、「蔵王町はパラオと同じく豊かな自然が残る素晴らしい町で、今回の訪問を機会に、交流を継続していきたい」との感想を述べられました。

その翌年の2002年には、パラオで開催された“日本・パラオ友好の橋”完成式典に招待を受け、蔵王町から3名が出席し、現地の方々と交流を深めました。

2014年4月には、駐日パラオ共和国フランシス・マリウル・マツタロウ大使が蔵王町を訪れました。北原尾地区の方々による手料理のおもてなしを受け、開拓当時の懐かしい昔話に耳を傾けていました。

戦後70年の節目の年となる2015年には、天皇皇后両陛下が北原尾地区を行幸啓なされ、住民と懇談し、パラオでの生活や帰国後の開拓の苦労など熱心にご質問されました。

この年は、町制60周年という節目の年でもあり、パラオとのさらなる交流に向けた機運が高まりつつありました。そこで、未来に向けた新たな交流の在り方についての礎を築くことを目的に、「パラオ共和国『未来への交流・絆』訪問団」を組織し、パラオ生まれの4名を含む13名が、自治体国際化協会の助成金であるH27年度国際交流支援事業を活用して、2016年1月にパラオへ訪問する運びとなりました。

日本語を話すパラオの高齢者

訪問団は、かつての日本人開拓地跡を訪問したほか、現地の方々とさまざまな交流を行いました。高齢者が日常集うシニアシチズンセンターでは、センターを利用するお年寄りから、流暢な日本語で歌う「君が代」で出迎えられました。

統治時代の日本語教育の影響で、現在もパラオでは「センキョ」や「ダイジョウブ」など、約800語の日本の言葉がそのままパラオ語として使われているそうです。お



年寄りは訛りのない日本語を操る方も多く、会話の中には、「エモンカケ」や「チチバンド」といった、現在の日本では使われなくなった、懐かしい言葉も聞かれました。

パラオの子どもたち

ミューンズ小学校へ訪問した際は、日本から持参した折り紙やけん玉、書道といった日本の遊びや文化を、子どもたちに手取り足取り教えながら交流を深めました。特に書道への関心が高く、ひらがなで「うみ」と書き、自分の名前をカタカナで書く体験に、子どもたちは目を輝かせながら取り組んでいました。



習字に夢中なパラオの子どもたち

パラオ政府高官への表敬訪問

蔵王町はパラオとの具体的な交流に向けて、2020年東京オリンピック・パラリンピックの事前合宿キャンプ地として強化選手の受け入れや、子どもたちの相互交流事業の推進について、アントニオ・ベルズ副大統領などパラオ政府高官へ要請しました。

事前合宿については、ビリー・クワルテイ国務大臣から「選手をトレーニングで派遣できるように話を進めたら



パラオ政府高官、ヘルズ副大統領を表敬訪問

い」との返答をいただき、子どもたちの相互交流についても基本合意に達しました。

2020年東京オリンピック ホストタウンとして

訪問団帰国直後の1月26日、内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局は、蔵王町がパラオを相手国とした、2020年東京オリンピックホストタウン第1次登録自治体として決定したと発表しました。

この結果、パラオとの交流事業や、オリンピック・パラリンピックの関連イベント開催費用などについて、国から2分の1の財政支援が受けられるようになり、選手の合宿受け入れのほか、子どもたちの相互訪問などの交流促進について環境を整えることができました。

パラオ選手団がオリンピックでより良い成績を収められるよう、蔵王町での強化キャンプや事前キャンプなどでサポートできればと考えています。これらについては、蔵王町だけではなく、県や近隣自治体、大学、さらにはホストタウン2次登録でパラオのホストタウンとして決定した、茨城県常陸大宮市とも連携し、「パラオ初のメダル獲得」という悲願達成に向けて協力していく方針です。

未来に向けた新たな交流に向けて

北原尾地区には、「南洋パラオを忘れないように、この地を『北原尾』と命名する」と刻まれた開拓記念碑があり、若い世代に北原尾の歴史を引き継ぎたいという思いが込められています。

パラオにはスカイブルーの海、蔵王には雪景色と、それぞれにない魅力ある風土を有しています。これからの大いなる未来を担う子どもたちには、相互訪問を通してその自然を体感し、異国の文化に触れながら視野を広げ、将来の夢や可能性を広げてほしいと思います。さらには、交流を通して自分たちの郷土を再認識し、先の歴史について学び、平和の大切さやこれからの友好関係についてもより深く考えることができると願っております。

最後に、クワルテイ国務大臣からいただいたメッセージをご紹介し、ペンを置きたいと思います。

「日本の国旗は太陽、パラオの国旗は満月を象徴しています。太陽の光がなければ月は輝くことはできません。日本とパラオはそういう関係です。」